いたち川の水質

朴木　英治

いたち川の水の供給源の常西合口用水は、常願寺川の上流部の水を集めており、その水の６～７割程度は有峰湖の水です。このため、水の汚れはほとんどありません。

さて、水の汚れを示す数字としてBOD（生物化学的酸素要求量）があり、この数値が小さいほど水がきれいであることを示します。また、COD（化学的酸素要求量）で比較する方法もあります。いたち川の場合、CODの数字を1／2した値とBODの値がほぼ同じでした。

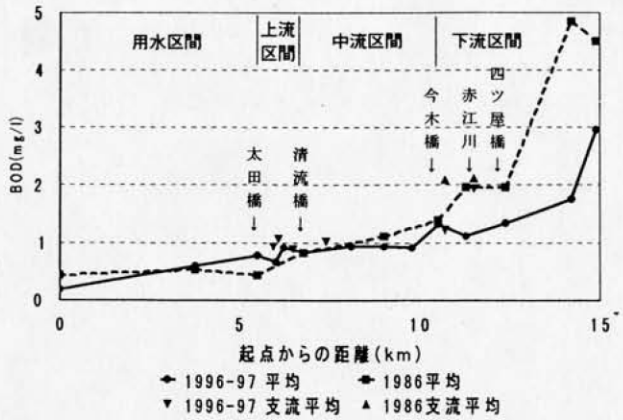
上流から下流への変化と10年前との比較

図はいたち川起点の馬瀬口から神通川との合流点までのBODの変化を示したものです。実線が1995年から1997年までの調査結果の平均で、点線は10年前の1986年の調査結果です。大きな傾向としては馬瀬口から四ツ屋橋にかけて数値が大きくなっていることがわかります。

いたち川の用水区間や上流部は（起点から６㎞ぐらいまでのところ）、まだ、下水道が整備されていないため、生活排水などがいたち川に流れ込みますが、実際にいたち川に水が流れ込む地域の人口が少ないことが幸いし、常西合口用水に比べてやや汚れが出るものの、中流や下流に比べるときれいな状況でした。

中流域の市街地（起点から６㎞～12㎞ぐらいまで）では、下水道が整備されており、台所や風呂の排水も含めて下水処理場で浄化処理されるため、いたち川にはこれらの排水がほとんど入ってきません。特に起点から６～10㎞ぐらいまでの間（清流橋から雪見橋までにかけて）では汚れの数字が横ばいでほとんど汚れが増えないことが見えます。また、この区間の護岸からの湧き水や自噴井から出る水も、いたち川の汚れの数値が大きくなるのを防ぐ役目をしているのかもしれません。

下流域では、松川や赤江川が合流するため、これらの支流が持っていた汚れが加わり、水の汚れ具合も少し大きくなります。そして合流点の少し上流の工場地帯を通過するときにもう少し汚れが進みます。10年前の調査では、いたち川に比べて



松川や赤江川の水の汚れがひどく、これらの合流後のいたち川の水は現在に比べて汚れがひどくなり、神通川の合流点のところではさらに汚れて、BODの値は５程度となっていました。これを魚の住める水質表と比べると、実際には水質以外の要素も当然関わってきますが、フナやコイが住める程度の水質でした。現在のいたち川では神通川との合流点の所でBODが３以下となり、清流魚のアユの生息が可能な水質です。また、起点から市街地の中流域にかけてはBODの数値は２以下となっており、この水質ではヤマメやイワナなどの渓流魚の生息も可能です（ただし、渓流魚の場合は水温が高すぎると住めません）。

きれいになったいたち川

いたち川の水質は10年前の時点でもかなりきれいになっていましたが、現在のいたち川はさらにきれいさを増したということがわかりました。この理由は、いたち川が水を集める地域で下水道の普及率が高まり、川に流れ込む生活排水などが減ったことが大きな要因として考えられます。しかし、水質が大変良くなったのに、調査をしていてなんとなく汚れて見えることもあります。それは水ににごりがあるときや川底に空き缶やゴミが沈んでいるのを見たときです。雨の後など川の水そのものがもつ濁りはどうしようもありませんが、空き缶やゴミは誰かが捨てたものです。これから先、見かけの上でもいたち川をきれいにしていくのは、私たち一人一人の心がけしだいと言えるでしょう。

（化学担当　ほうのき　ひではる）